

令和4年9月13日
株式会社スカパー・エンターテイメント
ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社

FOX チャンネル 番組審議会議事録

- ・日時 令和4年7月
- ・開催方法 新型コロナウイルスの影響により書面にて開催
- ・参加者 審議委員総数 8名
参加委員数 8名

(参加委員名)

- 委員長 山田 顕喜 (日本大学芸術学部映画学科元教授)
- 副委員長 前田 耕作 (生涯教育新聞社代表)
- 委員 木下 美子 (元青山学院初等部英語教諭)
- 委員 土屋 礼子 (朝日新聞社 取締役)
- 委員 名越 康文 (精神科医・評論家)
- 委員 藤田 興彦 (公益法人児童育成協会参事)
- 委員 三枝 幹夫 ((株)オリコンME WEB 編集本部 ORICON NEWS 編集部 編集長)
- 委員 阿部 京子 (ナレーター・キャスター・(有)タイムリーオフィス代表)

(放送事業者・番組供給事業者側 参加者：ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社)

- 小林 信一 (エグゼクティブ ディレクター チャンネル、サービス
ディストリビューション&コンテンツアクイジション)
- 藤 慶英 (メディア戦略 シニアマネージャー)
- 伊藤 由起 (編成 ディレクター)
- 高橋 朋美 (編成 マネージャー)
- 待鳥 雅之 (編成 アシスタント・マネージャー)

- ・議題 (1) FOX チャンネルの番組編成について
(2) 審議番組「BULL 法廷を操る男 シーズン1」について

・議事内容

(以下、* : 委員からの意見・質問、→ : ディズニーの説明・回答)

(1) FOX チャンネルの番組編成について

- 「マダム・セクレタリー」 S6 (ファイナル・シーズン) 7月20日 (水) 22時スタート : 米国女性国務長官 “マダム・セクレタリー” の活躍を描いた大人気ドラマも、ついに最終シーズンを迎える。大統領としてのベスの新たな挑戦が始まるシーズン6は、日本初放送。
- 「NCIS: LA ～極秘潜入捜査班」 S13 が7月4日 (月) 22時スタート : お馴染みのクリス・オドネルと、ヒップ・ホップ・アーティスト、LL・クール・Jのハリウッドスター主演の大人気アクションドラマの最新シーズンをオンエア。
- 「POSE」 S3 (ファイナル・シーズン) が7月28日 (木) 23時スタート : プライドと純愛、そして夢を追いかける、当時のLGBTQコミュニティを映し出す話題作の最終シーズンを日本初放送。
製作総指揮を務めるのは、「Glee」 「9-1-1」のライアン・マーフィ。
- * 「マダム・セクレタリー」はこれまでも興味深く視聴しており、最後のシーズンにも期待している。
- * 「NCIS: LA ～極秘潜入捜査班」も今までのシリーズを視聴していて、こちらも大きく期待が持てる。

(2) 審議番組「BULL 法廷を操る男 シーズン1」について

放送概要 :

2021年12月24日 (金) より放送開始。

約45分×全23話

番組内容 :

3つの博士号を持ち、人の心を読み解く天才のブルは、審理コンサルタント会社を設立。クライアントを勝たせるべく、陪審員たち全員のデータを分析、そして戦略を立て、証人や被告、彼を支える弁護士、国土安全保障省や FBI の元職員らのスペシャリストたちとで裁判を有利に導く。彼が扱う案件は、冤罪や航空事故、軍事機密まで様々。独自の視点から裁判に切り込み、鮮やかに真実を暴き出し、隠されていた驚きの真実を明らかにする。主人公 Bull のモデルとなっているのは、米国で活躍している人気司会者、そして心理学者のフィリップ・C・マグロー博士。

- シリーズの見どころは、裁判中に常に形成が移り変わる中、ブルの類まれなる洞察力と AI によるデータ分析を駆使して、次々と繰り出す一手で勝利へと進んでいくストーリー展開。
- 一見、冷酷に見えるやり手の彼も、時には優しさを見せる場面もあり、そんな彼の行動は、見る人を温かくさせる。

- *初期のころの NCIS のファンとしては、「トニー」がいなくなってから、俳優のマイケル・ウェザリーのその後が気になっていたが、主演ドラマが始まっていたことは知らなかった。
- *訴訟コンサルティングというものが実在するのか分からないが、純粋にストーリーとしては、面白いと思えた。
- *陪審員とそっくりな環境・性格の人たちを揃えるというのは、信じられないマーケティング力と莫大なお金が要ると思うが、この発想は最高だと思う。
- *今現在シーズン 1 を見続けているが、シーズン 6 にて終了すると聞いて残念に思った。
- *ストーリー展開が素晴らしいと感じた。
- *陪審員制度のことについても分かりやすく勉強になる。
- *それぞれの陪審員の心のつぶやきが聞けるところが面白く斬新。
- *この 45 分という尺の中で有利な評決に持っていくところが良くできている。
- *本当は、あと 10 分でもあれば、もっと深く掘りこめたであろうが、この尺にまとめられたのはすごい。
- *各俳優の演技も見事。
- *おそらくブル自身もトラウマを抱えており、そして虚無あるいは塞ぎようのない間隙のようなものを抱えていて、知りたい欲求が強く、自身でもそれを自覚していることが上手く表現されている。
- *公判のやりとり、弁護士と被告の対話、陪審員たちが後半の内容を分析する会話など、それぞれのキャラクターによる会話のぶつかり合いが、法廷劇を盛り上げている。
- *無罪判決が出た後、法廷でのそれぞれの立場での表情をとらえながらエンディングを迎えるところが印象的。
- *公判がヒューマンでスマートな納め方になっていると感じた。
- *法廷や陪審員の裏側を見せ、AI 分析などをベースとした心理戦など大変面白かった。
- *力作で、次も見たいと思う作品だった。
- *改善点があるとするれば、今回見たエピソード「消えたネックレス」はテンポよく進む中に、父と息子の関係、LGBT、若者文化など盛り込んでおり、一話完結としてはやや盛沢山で、登場人物が多すぎるためか散漫な印象が残った。
- *BULL は十分人間味があって魅力的に描かれていたが、「人の心を読み解く天才」というエピソードがもう少し見たいと感じた。
- *実在の人物キャリアに基づいて作られたためか、展開がリアルに感じる
- *米国で 2016 年から 6 年間も放送中とのことで、その実績に惹かれる内容。
- *日頃、比較的シンプルな裁判番組に慣れているせいか、疑似陪審など若干難解な部分もあったと感じた。
- *なんの予備知識もなく拝見したが、非常に引き込まれる作品。
- *当初は、陪審員制度の経年劣化を突く、スタイリッシュな“裁判化学”チームがクールに

勝利をもぎ取る、プロフィール&メンタリズム諸作品の系譜と想っていたが、物語が進むごとに感情、心象、そして美德が前面に押し出した人間ドラマを形成。

*主人公ブルの台詞「人に見切りをつけるな。人こそ希望だ」がそれを物語っている

*終盤、ブルと陪審員女性のシーンにおける自己否定とのせめぎ合いや苦悩を暗示させる締めも秀逸。

・ **審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置その年月日：**

今回の審議会に出された意見については、審議会が開かれた令和4年7月以降、各番組のプロデューサー、担当者へのフィードバックをはじめ、番組制作会議等で、活用し、さらなる番組の向上のために適切な措置を講じるよう努めていく。

・ **審議機関の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法、及び年月日：**

令和4年9月以降に、ホームページに審議会概要を掲載、公表する予定。

以上